

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 吉本秀之



学位申請者 藁科 智恵

論文名 神学と宗教学の狭間で —R. オットー『聖なるもの』をめぐって—

【審査結果】

藁科智恵氏から提出された博士学位請求論文「神学と宗教学の狭間で —R. オットー『聖なるもの』をめぐって—」について、吉本秀之が主査をつとめ、副査として学内の丹羽泉教授（主任指導教員）、相馬保夫教授の両氏と、学外からともに宗教学を専門とする久保田浩教授（立教大学）、深澤英隆教授（一橋大学）のお二人をお招きし、合計5名からなる審査委員会で、上記論文の審査ならびに口述による最終試験を行った。その結果、審査委員会は全員一致で、申請者に対し博士（学術）の学位を授与するのが適当であるとの結論に達した。

【論文の概要】

19世紀から20世紀初頭ドイツにおいては、「生の哲学」の台頭に見られるように、「生」「体験」といった生の意味を渴望するような精神的状況が存在しており、それは学問の領域にも及んでいた。この時期は、キリスト教信仰の自明性が揺らいでいる状況の中、信仰に関わる学問である神学もこの知的・精神的状況に対処する必要があった。このような時代状況を体現しているのが、19世紀から20世紀にかけてドイツで活動した神学者であり、宗教学者であったオットーである。彼が1917年に書いた『聖なるもの』は、専門を越えて多くの読者を惹き付けた。本論文は、この著作を繋留点として、当時の学的議論に内在しつつ、相互に緊張を孕んだ知的議論の布置連関、この知的議論を深く規定している当時の宗教的・精神的状況の解明的叙述を企図したものである。

従来のルドルフ・オットーに関する研究は、哲学的、哲学史的な観点から行われるものが多いが、宗教学における「宗教」概念、あるいは「宗教学」の成立自体に焦点を当てる研究が始まるのと平行に、1990年代頃からは、オットーの学問以外の領域での活動も視野に入れた研究が現れてくる。このような歴史的な文脈に焦点を当てた研究の延長線上に本論も位置付けられる。その一方で、本論文に特徴的なのは、オットーの『聖なるもの』を中心とした学的営為を、近代における信仰の危機と学問という観点から、神学と宗教学との緊張関係において捉える点である。

本論文の構成は以下の通りである。

序章

第一部 宗教的・社会的状況における危機

第1章 オットーの生涯

第2章 宗教的・社会的状況

第3章 オットーにおける宗教・政治・学問—ナウマンとの対比から

第二部 「宗教」をめぐる学的状況

第4章 19世紀神学における学問と実践

第5章 カント・フリースの宗教哲学

第6章 民族心理学において現れる宗教という主題—W. ヴントへの批判

第三部 危機への対処としての『聖なるもの』

第7章 R・オットーにおける「宗教的アприオリ」理解—トレルチとの対比において—

第8章 オットーとジェイムズ：現象と実在、合理性と非合理性の間の緊張

第9章 オットーとバルト：絶対他者

終章

本論は、第一部「宗教的・社会的状況における危機」、第二部「『宗教』をめぐる学的状況」、第三部「危機への対処としての『聖なるもの』」、という三部構成となっている。

まず、第一部では、オットーの生涯を見ていき、彼がこの時代に感じていた信仰と近代学問における真理観をめぐる葛藤を確認する。そして、彼が生きた時代の宗教的状況を教会内外においてみた上で、同時代人の宗教的・社会的状況の分析を扱う。これらの叙述を通じて、そこにおいて認識された危機的な宗教的・社会的状況を浮き彫りにしている。第二部では、第一部で見てきた状況の中で、「宗教」という主題が学的な議論においてどのように扱われていたのかを神学、宗教哲学、宗教心理学に焦点を当ててみていく。第三部においては、第一部で確認した危機的な宗教的状況、そして第二部において確認した「宗教」を学的に扱うことに際する問題を踏まえた上で、オットーのその危機的な状況への一つの応答として『聖なるもの』を捉える。その際、「宗教的アприオリ」、「現象と実在」、「絶対他者」という主題を設定し、これらの諸側面から、分析を加えていく。

第1章では、オットーの生涯を振り返り、幼少時から、ゲッティンゲン、マールブルク時代を時系列で追っていくことにより、オットーが自由主義神学を学び始める際にとった決断等から、彼が神学をこの時代に営むことに際して感じた葛藤を描き出している。

第2章では、19世紀から20世紀前半に至るまでの、教会内外の宗教的情況を確認した上で、その宗教的情況を同時代人である社会学者ゲオルク・ジンメル、神学者パウル・ティリッヒの分析を通じて見ている。19世紀において信仰のあり方が大きく変わる中で、教会もその状況に対処するため、社会福祉活動、礼拝改革等さまざまな試みを行っていくが、教会行事への参加率は低下し続け、信仰における教会の存在は弱体化していった。そして、それまでの教会という枠組みの外部にもさまざまな諸世界観団体が生まれてくることとなる。このような宗教的情況は、同時代人であるジンメル、ティリッヒによっても叙述されており、ジンメルは、それまで宗教的表象によって満たされていた宗教的欲求、宗教性が、その形式を失いつつあること（「彷徨える宗教性」）、またティリッヒは、特に表現主義絵画、つまり、人々の宗教的内実を表す新たな様式において表出されているという点を指摘している。

第3章では、牧師から政治家へと転身したフリードリヒ・ナウマンとオットーの関係を、ナウマンの『宗教についての手紙』とオットーの書評を通じて見ていくことにより、オットーにおける宗教、政治、学問の関係を分析している。第2章においてジンメルによって分析された「形式を失った宗教性」は、ナウマンによっても「故郷を失った宗教的感情」として叙述されており、そのような状況で、ナウマンは「政治家」として、この宗教性に「故郷」、つまり現実への接点を与えることに専心する。キリスト教倫理と経済活動、政治活動との矛盾を目の当たりにしたナウマンは、その矛盾について考え抜き、政治的な活動に自らを徹底的に従事させることとなる。このような政治家ナウマンの姿に、オットーはルター、シュライアマハーに連なるような敬虔な人を見出している。宗教的感情の危機的な状況への対処として、「近代においてありうる敬虔さ」を政治という領域において全うしようとしたナウマンとの対比において、それを学問の領域において全うしようとしたオットーの姿が浮き彫りにされる。

第4章では、19世紀の自由主義神学、特にシュライアマハー、リッチェル学派、宗教史学派における議論を「学問」と「実践」といった観点から見ていくことにより、その両者の乖離ということが問題化されていたことが示される。その中で、シュライアマハー、リッチェル学派によって、宗教的洞察、宗教的感情が、学問的認識とは別のものとして位置付けられていたことを確認し、オットーが『聖なるもの』において展開した議論がこの延長線上に位置付けられるものであることが叙述される。

第5章は、宗教哲学に焦点を当てた上で、シュライアマハー、フリースにおいて「宗教」という主題が宗教哲学的にどのように扱われていたかを確認し、オットーが、シュライアマハーの『宗教論』の意義を高く評価しつつも、カント・フリースの哲学に依拠した上で、彼によって宗教的感情が学問的認識とは別のものとして位置付けられていることを批判する。つまりこのシュライアマハーの「弱点」をフリースの哲学を通して克服することで、宗教的感情を再び認識論上の地平に定位しうることを示したということができる。

第6章では、19世紀半に学問として成立した実験心理学の祖であるヴィルヘルム・ヴン

トによって、「宗教」がどのように分析されていたかを確認し、それに対するオットーの評価、批判をヴント『民族心理学』へのオットーによる書評を中心に分析する。さらに、オットーのヴントに対する批判は、彼のダーウィニズム批判とパラレルをなしていることを確認した上で、その批判の根本的な点が、時間的なものと永遠的なものとの混同であったことを示す。オットーは、ヴントによる宗教現象の分析に対して批判を加えた上で、「畏怖(Scheu)」という感情が宗教現象に対して持つ独自の意味を指摘する。この「畏怖」に関する分析、叙述は、後の『聖なるもの』においても中心的な役割を果たしていることを確認することができる。

第7章では、神学者エルンスト・トレルチとの対比において、オットーにおける「宗教的アプリアリ」概念を明らかにする。20世紀初頭にドイツで行われた「宗教的アプリアリ」をめぐる議論の中心となったのが、オットーとトレルチである。トレルチが、心理学的な成果を取り入れつつ、認識論を修正し続けていくことによって得られるものとして「宗教的アプリアリ」を捉えているのに対し、オットーは、宗教に関する学問的研究が可能となる基礎づけとして「宗教的アプリアリ」を捉えていることを確認する。しかし、重要なのは、オットーは宗教自体を理性によって基礎づけようとしているのではない点である。こうして彼の宗教哲学的議論においては、宗教的経験における対象の圧倒的超越性、一方的、優越的に働きかけてくる性質というものが前提とされていることを明確にする。

第8章においては、心理学者ウィリアム・ジェイムズとの対比において、両者において捉えられていた「現象と実在」という問題を見ていく。まず、オットーとジェイムズの宗教研究における方法を比較した上で、宗教現象に関する研究が両者にとってどのような意味を持つものであったかを確認する。「現象と実在」という問題を捉えるための方法において、多くの面で両者は共通点を持っていた。しかし、ジェイムズが宗教現象を「現象」として探求していくのに対し、オットーは、「神学者」として、この「現象」を基礎づける必要性を感じていた。この課題が、オットーを宗教哲学的仕事における中心的モチーフとなっているのである。

第9章では、神学者カール・バルトとの対比において、神学者と「宗教学者」にとって絶対他者というモメントがどのように現れているかを叙述している。オットーが、自由主義神学の伝統に位置付けられるものの、『聖なるもの』において絶対他者的なモメントを示していることが彼の真骨頂とされる一方で、「新正統主義」とも形容されるバルトの神学において「絶対他者」は重要な意味を持つ。両者のシュライアマハーへの異なる批判を起点として、両者の捉えた問題意識、そしてそれへの対処を明らかにする。そして、オットーの学的営みを、彼が感じていた「宗教的世界観」の危機に対して、「近代においてありうる弁証論」として展開されていることを示す。

むすびとして、キリスト教信仰の自明性の揺らぎ、その中で急速に妥当性を持たなくなりつつある宗教的世界観の危機、このような危機的情況の中で、オットーが「近代においてありうる神学者」として、「真の弁証論」として出した応答、それが『聖なるもの』で

あった、としている。

【公開審査（最終試験）の概要】

公開審査（最終試験）は、2017年（平成29年）1月5日、午前10時から正午まで、アゴラ・グローバル3階プロジェクトスペースにて行われた。最初に藁科智恵氏より提出論文の概要と意義について説明があり、その後、各審査委員が講評とともに質疑を行った。その質疑に対して、藁科氏との間で応答があり、最後に藁科氏から今後の研究課題と方向性が示された。

【論文審査および最終試験の結果】

提出論文について、審査委員会から以下の点が高く評価された。

(1) オットーの宗教理論構築の作業を、時代の文化・思想・宗教状況のうちに深く巢食っていた「危機」への対応という観点から整理したことは卓抜であり、オットーの思想形成の動態を跡付けるに当たって適切な選択であったと考えられる。

(2) また、近代宗教哲学の中でも、最も議論が錯綜しており、理解が難しいテーマである新カント派周辺の価値論的や認識論的哲学の論争状況を取り上げ、丹念に解きほぐして、その論争の中でのオットーの位置と思想的特徴を的確に指摘した点も評価に価する。

(3) 神学史においてオットーが論じられることは今もってまれであり、同時代の神学状況におけるオットーの位置付けといったことは、これまでほとんどなされてこなかったと言っている。その意味では、ナウマン、リチュル、トレルチ、バルトなどの神学とオットーのそれとを逐一比較対照させた考察がなされたことは、オットー研究に取っても重要である。

(4) やはりユニークであり、前例のない試みと思われるのは、ヴント、ジェイムズらの心理学とオットーの所説との比較検討であり、これは今後さらに展開するに価する問題設定であると思われる。

(5) 宗教概念論の問題など、国内外の宗教学説史の展開を踏まえた上で、オットー研究の中から近代における宗教概念の生成の一端を解明するとの姿勢が見られ、この点では学説史研究に重要な貢献をなす成果と言える。

(6) オットーの著作成立の内的動因と外的事情とをバランスよく論じ、近代ドイツにおける一人の学者としてのオットーが置かれていた、そして彼自身が体現していた宗教的かつ思想的状況が見事に描き出されている。

(7) オットーを「宗教学者」にも「神学者」にも還元し尽くすことなく、一知識人として生きたオットーを多面的かつ立体的に描出することに成功しているといえる。特に、彼を同時代の神学史的文脈の中に位置づけつつも、神学史的なオットーが描かれるのではなく、宗教史的・思想史的な観点から眺められたオットー像が生み出されており、従来の一面的なオットー理解を超える第一歩として評価できる。

(8) 「宗教学」の学説史の中にオットーを閉じ込めて理解するのではなく、オットーに代表

される「宗教学」そのものを同時代の文脈の中に位置づけ、その知的状況から知識社会的に分析していこうとする氏の視点は、従来の学説史研究の枠組みの再考を促し、より広範な学問史的問題を提起している。

なお審査委員からは、以下の疑問点および改善すべき点が指摘された。

(1)全体にオットーに内在する形でその学説の解明を目指しているが、宗教学説として今日オットーの所説をどのように評価しうるか、という問題については立ち入った考察がなされていないのは惜しまれる。

(2)オットーの『聖なるもの』は「真なる弁証論」を目指したものであるという位置付けがなされているが、その弁証論の目指した目標及びそれがどれほど達成されたかという点については、必ずしも十分とはいえない。「宗教」の弁証であるのか「キリスト教」のそれであるのか、また宗教体験の現象学的解明で止められているのか、あるいは實在論的基礎づけを目指したのかという点も、いささか不明瞭なままとなっている。『聖なるもの』が近代的懐疑論と不可知論をもたらした「危機」への応答であったとすれば、それが何を指し、どれほどの射程を持つ答えを提示したかという点について、より明確な見通しが示されればよかった。

(3)神学史の叙述に関しては、参照された先行研究が限定されている点、やや不十分な印象がある。

これらの疑問点については、最終試験において藁科智恵氏は十分にそれらを自覚したうえで誠意のある回答を行い、今後の研究の発展可能性をうかがわせた。また審査委員も、上述の問題点が必ずしも本論文の学術的な価値を損なうものではないという点で意見の一致をみた。そのうえで審査委員は全員一致で、本論文が博士の学位にふさわしい成果である、との結論に達した。

以上、論文審査と最終試験の結果により、審査委員会は全員一致で藁科智恵氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であると判断した。